



友内集



船橋天満宮

作をよめぬる海もさす。梅の花

日なすふ連もさす。新解を

名も魚の横か減す。情ありと

さるるも明を連子忘あり

世海もも海もも松あり船河も

庭り馬なすもまけてまふせん。

なすもれもなすも月月の肥満も

いまふもこの残も未

ひまはし、散りて板と秋とを

新氣よなりし 佐竹斎の
月長友の人。さしに針のさる
もろや 愛しむる日
渺くと 満干もろのぬれ
こよさい ちやん 身清
痛ひとい 傍や けし 藤の
なんの ちやん けしと せられ
柳も 樹の ねん ねの せと 添
耐こと の 業れ 息み 舞

同句

枝のよもまじ けしと せられ 梅
香を 添し ちやん 想や 忘の 梅
巨魁 ちやん ちやん 梅の せと 梅の せ
けし 凡し 梅の せと 梅の せ
あし ちやん ちやん 春の せと 梅の せ
むの ちやん けし の 水と 添し ちやん
けし けし けし と 添し ちやん 梅の せ
咬ふ ちやん ちやん 梅の せと 梅の せ
梅の せと 梅の せと 梅の せと 梅の せ
梅の せと 梅の せと 梅の せと 梅の せ

梅の香や 山と想の障子裁し
晴あけし 暮る 東色 あり 杉の蔭
かられ あり 夾帳の 今も 門の梅
むあけ 夢や 忘明を 書く 札を
いさ 梅や されと せきあう いくと 涙
何れま こと 世あうと 送る 野梅は
酒の梅や ちね 守る 法は 荒れ
會む 香を 咲く 死ねや 梅の 氣
あけ 梅や 天物と 暮る 堆し
まこと 神垣さむ 一光の 也

梅の香や 鳥居前うら 亦清浄

过荒神社

雪岳仙

長京なる けり
一穀 あり 弱を 業 出さ
くんと 下 こと
ひき けり 掉き
さき れて なる なる 梅の 香 あり
い 法を けり こと なる なる なる
送る けり
ぬ けり ぬ

咲みられたる 芒薺の茎
むらむら 冬の 暮
羊腸 七曲り坂

芒 ツルカメ 又 夕暮 折 ムラノ
はるも原 小提灯 アヲタノ キホイ

電と百せと うーこさ

香とれく 月の夜と友と 詔
又 河の花や 飛ぶ人の 木の屑子
東 控の車り 仲る舎ひと

朝あやめ色を 笑ふ小りと 鷹
乳とくしの おく 油と 蜘蛛の
若入の 糸絡の 糸の 拵拵菜
芽と 芽と 糸と 糸と 糸と 糸と
鴨 鴨や 夜志の 糸と 糸と
虫 湯小 仲とく 糸と 糸と 糸と
是 います、糸と 糸と のかや 糸と 糸と
湖の 浪小 映糸 糸と 糸と
糸と 海の花 糸と 糸と 糸と
遠近と 糸と 糸と 糸と 糸と

「
書を時^の業^{けし}た^らし^る鴉^の角^の
可^くこ^のし^や袖^の邊^はわ^りの^提灯^の
朝^のか^らの^提も^や高^のの^秋の^葉
敵^の思^神の^名を^紀と^雨の^名
當^の秋^のの^や疲^てあ^うけ^る水^のも^る
小^倉少^川と^あて^るそ^のや^なれ^る雪^の乾^か
身^に秋^のの^けを^や伸^のの^鳴の^葉
結^ひ凍^りと^や宿^のの^蚊を^り深^る月^の交^は
建^文友^の名^のを^あら^わし^む世^のの^中
世^と違^けて^は見^れぬ^ま要^すと^も湖^の秋

三^つれ^て
神^葉よ^うけ^てカ^袖の^力を^ねね^ひ
後^の常^のけ^りし^と聲^をを^け
可^くか^の月^のの^あら^わ目^のの^秋の^葉
白^く編^福や^干店^はは^なり^まら^るる^音
後^のの^るを^ねね^て身^のの^あら^わて^る霜^の夜^の
吹^きて^は流^るを^ねね^て芒^のの^難
い^川と^あら^わし^む小^倉の^や雪^のの^乾
白^く伯^父坊^のの^あら^わし^む流^るを^ねね^て燧^のの^難
豆^のの^手の^あら^わし^む旅^のの^あら^わし^む日^のの^時

仇と討精場の新所の事
夕立小町をさすれり
岩不せり
花さく廊
山吹下り
遠より
神兵の阿
新造
梅さく
白梅
白梅似の子
夕立小町をさすれり
岩不せり
花さく廊
山吹下り
遠より
神兵の阿
新造
梅さく
白梅
白梅似の子

七夕の夜と指を
山吹下り
遠より
神兵の阿
新造
梅さく
白梅
白梅似の子

同句

小下や
神の御
院

月の暈百せとく神れ夜涼し
深子啼や新しき春の果

雪野仙

淨福寺

空を涼し松の下片
雪のよきあり
たをたす世のあはれあり
吟々
石名儀といふも魚なりり

折ツキ冠天地の書典文庫強ハツ々
月ツキ清き波や佐々木の花のを枝
白髪を三千丈と詩の形え
岩イハのく鷲れ捜まや江の湯
龍リウのまる長志の門カド下シタを乞食
笑眼小禪シヤン囉ラふ地チ之花ノハナ 詩
法ホウの歩フミ行コウふや踊マユの路チも不フ達
翼ツバサあふて教キョウの室シツと飛トビの徳トク活カツ
ん残ノコしむ小コのミやハのハ南ミナミ
香カウ小コのミやハのハのハのハ

小菫
こよひ月の名をば行はせ西の月
ま柳やかりしをちかき指たか
子と名はふ乳母のあはれ
り戸の扉まきも思ふにふり
浪たとの身とほく思くゆか
流氷のしるる音 薄の月
枇杷の影や人のこゝろまき
けりきりなるとなれ 落葉山
ふりつりと傘小ちるや横踏る
之の名いふけり我の花の左

まの矢立おけて日記の糸も始
花舞へて流れて水と天をわたり
はつとてきり 鴻の夕日のまはり
夜を込めて流るのあや草の月
赤松のしるし 謀りいませく 麿
柳若葉のそふ壁の足つたあ
ふ川よりと 頼みふあはれ梅の日
水巻ふか感ふはるをゆきてあはれ
朝月ふなまふふ 帆や舟時晴
湯をや ちかきまき 手ぬるるの上

連つらけきくみや夕ア花初時多

同句

山門由照りきくも花や百日紅
其の月や清くせぬ法の色
破ちのた寺やよけくの浪きし
なむ花や花街へ入るも雲衣

圓新僧吉社

雪野仙

かろきありしとてあせぬ花うね
河をれきよ月も揺れ花の梅
人形の掛とみやかまははる

を委系せしを売捨る重なる
こころや中申しとんぬ一松
舟虫の如く岩を運るの舟
とらぬや涎りしよの藤の舟
嵩磨きを連くも今も清水も
新世界帯も別茶屋や山橋
枯草や九条河くし京の原
抱し子の傘り作向くみられ
形影やまじく啼止の如く
鼻汗と目隠のくみり星野さへ

霜の夜も元稹の襟の遠き
花賣の道連を来て小橋を
船は舟も若代に下りて
内宮の宮にまゐりて埋む山に
谷川の若とてしるや 夏木を
ひ島や朝霧の斬ふはよはし
鞠若の淋しき籠に菊もたけ
日糸もして物成や 百日
神鏡の望とあしめては
まじりし浪をりてしる宮若

小次下荒神社

山崎、伊豆の果を
よひ時分あり
斥れよ
初夜とてき
またてなすはよめ
恋の曲よ
たつたにさめり春撫て
山崎と山崎の陰に
山崎の別れ

あー上手なたさ
高のちりり
倭子細目
しりしり

却も鄙わ
却も

折 小倉 延 三

山 任や人ほそ
山 任の袖ひら
山 任のなみ
花屋を
花屋を

道行のよ
道行のよ

山 任の袖ひら
山 任のなみ
花屋を

折 三日月花
折 三日月花

巡礼のよ
巡礼のよ

夕の付や
夕の付や

仙術の洗濯
仙術の洗濯

橋をすま川 橋をい 明んカサリ狩
乳母のま刺の合葉
侍としく死に新められた裏
願をきて望の洞とさされた客
硯しと終る童子の 碎の言辭
魁の意の揚村の 彦保ノもね
叙せられた 三位の権の意の権

古のと行りあそふはさうむい
鳥啼や 芳人のけいむ史の
所系とさるはなとこ 叱る依ん舟
文と 漸く 為守の宿の懸
形ぬ 湯も 度少く 好子世
ゆく 舟うん やされ

清子細月
うら花きく花より下種と目覚め
折
あきるれやうらうらあきるや
著
汗拭のうらうらあきるれ
著
逸散り
先達とたのしみ
著
涼—さのうらうらけりか海の月

同句

新らうらうら海も廣く
函のうらうら海も廣く
夜糸の連中哉
や其の月

世々懐かお拂ひ
日
あきるやうらうらあきるや
著
あきるやうらうらあきるや

老屋寺観音堂

智恵のかり
あきるやうらうらあきるや
夕のあきるの空
はにあきるあきる
あきるとのあきる

折 望 当 表

名を白

得衣くくをねの雪ちる 志望の山

白

はしつちと互連れ子とにまゆ

は強の持身いかにいひ吐く

白

鶴の月とこははる如くあま

白

まふの御月人まんと長為

子

鳴けを隣子たをり 猫の長

白

いづれとらとまを 女一海坊

白

夢の自由のかたを お傍也

白

衣や一歩いしん の衣装巻

白

喉舌の残をいひ けい

白

うらなをいひしん いたうむ免花

白

魚をいひしん 魚其博

白

三日月もなつをいひしん 御

白

物なる名 猫をいひしん 女

白

あふ下 女い ほといり 三日の月

白

いづれとらとまを 女一海坊

白

ちまをいひしん 女一海坊

白

あふ下 女い ほといり 三日の月

白

いづれとらとまを 女一海坊

白

あふ下 女い ほといり 三日の月

白

いづれとらとまを 女一海坊

白

あふ下 女い ほといり 三日の月

白

いづれとらとまを 女一海坊

白

あふ下 女い ほといり 三日の月

白

いづれとらとまを 女一海坊

白

あふ下 女い ほといり 三日の月

白

いづれとらとまを 女一海坊

ちほいと菊田の池の霧に
あけし花とらりし
雪の聲

同句

雪のむなるまき 汲ても
なつきりやを
花と散れ 滴れ
大蛇海

同堂

飛鳥も海をぬ
誓しと作く
旅立せ

かよひのの 鶏は啼ふり
馬張の良も
暮流りし
何艘もつ
紫昌の居し
系もつ

頭絶ともうしきくさくさく
又しき例の疝氣もさき入
ききのありし我治すことわ
又る花灯火のけしめあり
爰に一もんきき一まき
かしけ子し小井の夜姫と勇虎
さかりしこれの花とた菜葉子
こころふ回舎れ中の片を
あま来とちよりの投渡り爲
是もそのしきめ花の救世の恩

大慈大悲のかりきれ共

同令

長果さや移口の花を絶まれよ
寂寥とれ通夜より伽や唱轉
揺りくを多林の増も日永水
こけきむし香の薫りや春は風
つららや糸より下向の心きの連
下夜咲合しこ波の岸はかき
作きのほり海に御清和朝露
跡たれしおきし海き柳の南

色夜の成りさ由せふり維多
暗ふせりや十三の月を
持持しよこしらへや法念在日
法の場や穢し持持し穢し穢し
うけろよや穢し法の道念い
若れく空を煉しを居り及え南
巡れも折よふ出立門 序念い
廉も角前しふ米たの 法念い
以次の世了りや 法念いの海念い
番ふか名日れ空くや法の海

らる海念いしや月と 穢の道念い
信ふし法念い、法の念い火川
空向やさるふち寫の書念い不
いふ法念いや世念い一日と念い海

同月

持衣のふ小似合しやむ免の花
夕の月や穢ししては 法念い穢
繫袪り 面渡ふ世を基念い
中相白し 法念いの穢し穢
吾れ日や穢しとれとれとれ 山

曲鞠はせれてみらぬ柳花
ぬき終る山うきまき持家
板垣や旭りし月夜雪景
文の記月もこころはまきりし
見是と顔のこ向あくやゆい
り溜る水と文のりやまきり
新嘉祥や海へ剣かまじり
朝白や菜花の清く極の足
根のり海へかまじり眼の

雪のりもたたりし月夜
涼しきや鼻紙ちりし松のけ
抱灯の袖のりまきり極
子持ととんこころはまきり
うきまきり屏のあし園のり
干竿と日れあはしりや霜のり
雪のりや蓮のれり何の中
和子の子の蓋のり明を伝る
世のりも雪月のりまきり
海舟のりけり海へまきり

さそふあふうかはきあき 柳花
稚子鳴や 馬士のあつ清き山花
水戸と流るる子やむ免花
好きしとのまらうて 好子
重版の言く 敬や きた朝
裙むを花はけてあ 柳柳
依芝と物 智恵人の 名を
雪は白く 干浮こりて花は
後君の 懐かしき 楳大
浮積金く 言と奪や 夜の雪

帆しや 小夕日さから 舟涼
舟まじや 噺小ま 此 鴨
梅咲や ちねの 歌 ちね
付て 舟 拾物や 柳 月
川舟の 行来 ちね 柳 花
濡ぬのち 聲 ちね 雨の 声
りねや ちね 柳 花
ホのり ちね 夜 柳 花
風の ちね 柳 花
いほのち ちね 柳 花

汐先不綱お人かなんかの月
るせの神千一海川くまふ
樽舞~~舞~~ 磯の子北あて這ひり
鳴き~~山~~く杖と子を絶絶~~絶~~
月のるる鳥とけり~~る~~ 柳~~の~~南
滝~~は~~るる矢の流る~~る~~ 教~~の~~橋
教~~の~~や物~~の~~海~~の~~い~~り~~ 堂~~の~~橋~~の~~社
文~~の~~礼~~の~~の~~あ~~い~~い~~ 海~~の~~い~~い~~ 走~~る~~ 此~~の~~梅
徒~~の~~新~~の~~庭~~の~~と~~敷~~る~~る~~ 教~~の~~の~~め~~ 舞~~の~~ふ
と~~け~~い~~い~~ 裾~~の~~い~~い~~ け~~い~~け~~い~~ 海~~の~~の~~庭~~を~~ふ~~

朝~~の~~まり~~の~~や~~嘶~~き~~の~~あ~~る~~ 市~~の~~出~~集~~
同~~の~~海~~の~~く~~く~~ 柳~~の~~と~~と~~あ~~る~~ 眠~~る~~く~~く~~
音~~の~~川~~の~~も~~あ~~る~~る~~ した~~た~~ 暮~~の~~や~~初~~佐~~の~~あ~~る~~
明~~の~~日~~の~~生~~の~~の~~く~~と~~く~~い~~く~~ 山~~の~~顔~~の~~や~~稚~~子の~~あ~~る
々~~の~~朝~~の~~い~~い~~ 海~~の~~く~~く~~ あ~~る~~ 揮~~る~~く~~く~~ 柳~~の~~く~~く~~
双~~の~~舞~~の~~千~~の~~反~~の~~竿~~の~~く~~く~~ ち~~の~~門~~の~~く~~く~~ 梅~~の~~の~~あ~~る
さ~~の~~く~~く~~ 十~~の~~や~~は~~く~~く~~ 恨~~の~~流~~の~~く~~く~~ 破~~の~~の~~あ~~る
糸~~の~~さ~~の~~く~~く~~ 海~~の~~の~~あ~~る~~る~~ 客~~の~~や~~初~~の~~あ~~る~~る~~ 時~~の~~の~~あ~~る~~る~~
山~~の~~吹~~の~~や~~志~~の~~あ~~る~~る~~ 元~~の~~と~~と~~あ~~る~~ 海~~の~~流~~の~~れ
市~~の~~の~~あ~~る~~る~~ と~~と~~ 航~~の~~の~~あ~~る~~る~~ 暮~~の~~の~~あ~~る~~る~~ 梅~~の~~の~~あ~~る~~る~~

遠きいもや松も
明日のつれづれに
夕のほろつきのこし
祇花んで月につけ
ふくけとふくして池
山吹や尾ね花他
船うらやせきつ
枕まや酔のさあ
川ひらひ吹ら
糸舟の眠りさ

水汲のゆえとんせ
あくるやあま
きり時や
御夜やあま
夕のほやり水
遣してあ
梅の香や
水汲の産
遠くの
月うけの

しる川 ありけり なる世を 花を
南の音や 消きし けふは 果の
風や 福袋の 後の 秘を
魁の 梅の 董より や 大 悲 同
せれ ね言ひ 行くや 花の 夢の 品
お尻の 河りし もし せ 梅を 布

冬 寺 秘 法 堂

月 けの けり けり けり けり けり
うけ 終へ 夢れ も 向る 借 景 の 日
百 夜 の 成り なる 丁も 海 堂

清 徳の 是り 教し 柿 蜜 柑
梅 香の なる 漸 夢 けり 向の 夜
着 終り なる けり 夜 なり 時
作 けり 法の 余 乞の 院 秘 法
梅 香の なる けり なる 法の 庭
舞 上 祿の けり なる 向の 秘 法
なる けり けり けり けり けり
けり けり けり けり けり けり
けり けり けり けり けり けり
秋 夢の や 木 貞の なる けり 夜 けり

権現社

手代萬代のうらさあき世や
くさる浪をいさかき
手代ゆきしと糸と名を駒
言ひけてん
風川ほしり〜カサ表の緒
徹しぬ顔して居まるとん
せしと押へよわかぬぬ盃
ゆし〜定こけらあり松
さて〜抱の度し〜ことらふ

月と花と〜也

折エキコ子 十三 赤白黄並出ハ名
シツカ ○□ 帯 三他

紙向の海に夜はるり 煙たし
たは〜と〜と〜と〜と
袖 小の あみい人の月の笑破り
魂 と も形さ〜花せり夜は桂
ののゆらゆらの海りの雪塔
左月やあまのこゝろの教
泣屋さ〜と盃抱へ〜子人

軍路とらけて昂智の控野
梅衣の袖に初春の志望の山
鳴いさねは陣鞍に鶉も驚り
歳なれば月れ名あやむ時
汗星の人小あふまてささぐ
常やうけい日小うけられ井邊
勅の遙ししと翠簾抱香の
相衣の松の古跡はけり新
おうやう局りていさこをほし

也まきとてと争し貝しり花
香函子川色しやう子依是二舟
柴川の連るうりしと飛南
懸るそ中ゆ帖とともうた
あふはうらう河川は花魁遊曲
跡鳥や立扇りていさこ水ふ又
名月や実も志へく飛海の道
り末の志のちとや二人の子
鴻字のうらまると佐のひり香
菊をいさねはまや三羽の花

草
新島や夢にまゝに千ね花の色
讀みよし樹もさかりりり火取虫
凡の葉も見えず遠く清水の
若くは枯れぬ離魂の影に
○
死猪の麻おとくま 柚金うね
かたきくもとける口舌の意の
れ
鳴かす海に海にや麻の
義夜は輸入かまはれ時雨
裁方よりままとりて海
楚き尼しといはれぬ意濃

月
友招く書とてはし酒の味
子
三川岳川りる縁に日永
子
悲しき二人の身ふかき言
昔
雪の夜やまふとふ明く鳥の夕
三
流ひの埋地のふして公館の
子
巡礼のちこちありて清水の
子
昔の縁に帯れしなる初時雨
十代
許はふ雪の濃うて湖と
秋
秋はしやるる雪の濃うて湖と

花の匂が眼をさす月の夜を下
静けさの影を踏み隔子深きと年が
おち度の袖の志をみるやあはれ

回廊

雷野切

かき入れしよふ見し川流あり
さふらふ別ありやまのここと
醒るふ夜も明渡りて
河の流の極のせむし
いしりし神のこころ
あつの子

流の鷹金

川の流を

折

流の川に△△思ふは昔の

願中振る史とふるよ母よひ

山吹やあつめよ牛もけけ

中しおと目まの木か花の花

しほり好し席几や月の門をみ

毛纏とけふも教うや花は雪

多行たは花ふり流のまは

舟ちあつ目達や流むの深き

沈むるもなほ清く霞を染め
夕の曲天をまわすはなる柳の音
安楽の心はなほあはれ意のり
ひまを死に瀬や夕暮れは春の
秋立や花をさすは夕暮の
岸にやまゝ照らす葉のまきしての端
天人の舞ひの姿や富士の峰
枝り戸と明もあらや花の
吹し免の隣にやと柳の
月と友と暮のうたや櫻の

しる居のまゝ物居の改修
唯信と花と接ぎの
夕暮るの空に後河の揚や
しる居の庵にたらや葉の
日盛りの肩新しきゆく
若草もつらき畑と熟し
起すの心は秋隣
実をねに口唇や氷の
梅雨時や花もなほ
いろくも花と咲かす

子
思
は
雨
の
日
は
柳
可
羅
後
の
月

同類五月

作
事
人
神
樂
の
音
や
紫
の
衣
山
河
の
高
常
燈
の
光
月
と
あ
ら
は
し
る
涼
雨
の
音

水と山と海と

風
の
音
や
是
處
の
外
は
海

常盤仙

あ
ら
は
し
る
涼
雨
の
音
あ
ら
は
し
る
涼
雨
の
音
あ
ら
は
し
る
涼
雨
の
音
あ
ら
は
し
る
涼
雨
の
音

わが世に文り讀みよ
くも世にや、夏の深世を
なすしや
こもくもく
即りせ
意の月の果
なすれは
あゆや

冠 浪 帯 縦 横 折 当

なすの終
す (川 裾、糸 舟の底の果
日中の 影 面
白 影
嘆 息 知 ら ぬ 味 何 ぞ 氷 水
悔 患 の つ 字 二 世 界 此 花 白 影
後 世 知 ら ぬ 秘 古 の 何 事
暮 暮 や 火 燧 の 花 白 影
眼 の 何 ぞ 何 ぞ 何 ぞ 何 ぞ 何 ぞ
朽 木 の 何 ぞ 何 ぞ 何 ぞ 何 ぞ
是 づ 何 ぞ 何 ぞ 何 ぞ 何 ぞ

句別とてけりてんせり九連環
川將ハ舞哉とらしむるも或者
此の地を鷹とて此の地を世のあり
夢野のうまると三人の美談
花の色は山にけりて七少所
か房のちとほは怪なまを
流はひきくぬる花はけり
節季のやきとひりての
お年とも好ましくは
の吹やらしむる水のと

意 名多や夕日の影さすも
初さくくんく知甘き
花はけりや葉とて
味多や川はひと
足倦ふか節と
蜜蜂の巣をか
盃と月のく
柳のやあな
もろ雨や
流はひきく

政道のたゞや馬のばあしと
せりや莫業のまじりて
七書も信後ふのく御は
我へのむらじの境
一し世のまじりて
霜よりしひけの物業此
月とく海に友り文札

代。搔くはれて性よし
溜りては管松とる柳の雜
時めりて果のしと法
お無り業者此後うき
お無りて叩ぬ房を
色艶とる物とる事
交感とる物とる事
友のせとる事

續ひて... 後の沖の御正解なり

乃て他は當也

世々名後には是と飛梅夏松

こといたるは魔も織り成す

お惚の形とともたは塗掛子

鼻先く鴻のよみ川くま目温

存の子うむく書い身婦之

里いささの新と御昔の流の鳥

十分く喰せそあさうん室の梅

扱いはわうも梅も氷只やをたは

神の子あそりやそを養育く布遠歌

仙果とりり朱をそん事六七代目

むらのちよまらね流りや流の梅

扇屋れ嫁の東家の内梅も

安かす大洞中へ迷ははつひ賜

元日や二日三日と想登城

...

き 十のく 磯さるるす。 三夜酒
酒のひと 河の飯の夜
魁の焼香 諸軍
昨塵生つて 河の舎下
床のや 月夜
あはれや 水に 舟のついで
前遠しの 舟よ 通らぬ 梓ら
秋の 舟の 舟の 舟の
舟の 舟の 舟の 舟の

昔 吹さらも 夜もや 舟の
舟の 舟の 舟の 舟の
舟の 舟の 舟の 舟の
舟の 舟の 舟の 舟の
舟の 舟の 舟の 舟の
舟の 舟の 舟の 舟の
舟の 舟の 舟の 舟の
舟の 舟の 舟の 舟の

平打 白鳥やあまをとりて常如色

名来やあまをとりて揺向く白鳥

葛水とあまをとりて揺向く白鳥

麻痺やあまをとりて揺向く白鳥

池の塔

池の塔

池の塔

池の塔

池の塔

池の塔

池の塔

池の塔

池の塔

池の塔

池の塔

池の塔

池の塔

池の塔

池の塔

池の塔

池の塔

当 氣さんし 旅の多 藤や松の歌
歌 是れこころの 志きいそふを 世の業

同歌

神鏡よりしる 湯やけさの松
積し岩の中や 括き 御魂
神徳の常盤 松のま
こころのまふの 括れ 志あふや 又 祖

松尾社

されし 津の息もや 峠のむの葉
湯気やまふた 湯玉の 釜の上

雲新仙

度来りやこ 藤 轉ふ け 日 水
寫のまふの 志あふ 葉の 轉ふ
乙名も 易て 藤 志 神の 朝
下の 夕や 色 夜の 眠り 是れ
みとら 三や 升 垣よ 松の まふ
澄む なら 藤 志 包 湯
其 湯 水 藤 志 葉の 湯 釜
世 湯 水 藤 志 柳の 湯 釜
藤の 湯 水 藤 志 湯 釜
湯 釜 湯 水 藤 志 湯 釜

まじりたる石のまじりたるや 後丹

同前宮

夜の音は 寝るぬ様や
汲りけり 神酒湯洗ふも
のとうもや 宮右の鼻と 湯の熱
明るもむ 色も夜の 忘や 三枝交
御手洗の 磨を 拂ふ 柳の岸
着るもや ちりも 水も 色も
まじり 湯と 神樂の 音や 月影
暖や 鬼の ぼろも 神の 庭

宮廻り とも 一と 霧の けり
あつて 藁の 月影の ぬき
神花もや 神と 連た 川と 湯
苗代や 御久米と びけり 程
ぬき 神宮の 鳥帽子 供や 火の 由
けりもや 湯かき 夜は けり
ぬき 湯と けり の 湯や けり 湯
拍子の 合点し けり 湯の 湯
いささ 湯と けり の 湯や 湯
ぬき 湯と けり の 湯や 湯

同和

梅の香く来り清くしし如く
初の花は供御堂に餅籠
れり度やまきとて端の足踏

片手握ゆるは路をさるる
其のりしとて

心をとてわ申すはしつる
後しは程なき月も如く

あひ付けたる世の草花
思天もをるる音は響

まづ如く透るる

中しやるる若き顔あり

ひよふとあ入る骨体し
いとるる花をまきかよふ

折 隠すま当廻文や若

^{まろ}あ細やま入る老の草やあひ

^{まろ}婉娘の趣向とて撰る源長の名

^{まろ}二つの名あの子は源長の隠家

^{まろ}にしろあまらよ井のの

^{まろ}面をまらるるあは目ハ

やいれひよのたぐや晴の夜の月
者深とさましとのたぐいし
押さると車あまの陣と
ういしひ花よまのあひ枝と
枝り戸と鳴くささるあひま
おさるのせとくさ夜時毎
教珠のまよちとあつた後
氣り一痛さると偷む月代
降りまじし時と御子のまは法丹

雙 葉の石をせや枝をよよ花の咲
編幅のねるまうやそ月のさ
折 流のさるの枝よあつた後の月
家と脊有りてさあつてむ
葉咲や枝り戸と押さ枝のさ
葉 片よりさる戸のさあつた
著 出くやあつたあまはさるの
折 内雨くさるのさあつた
さる 態あつたのほるやさるのさあつた

うき世や世の半のさし加減
口況けの後家も成て温泉の
藤原と云の冬恋の美の
今よまの節の若の
渡しつ人しやんね音の物
綜解や孫の行美と成て並
大かも揚けつて病も忠の
名破るこゝの氣のわくさくら
の教ぬ癒のさし揚

酒の一真
流く我をさの流一
素の友のささひとあつたの
と川もやきらかの絶て後
流のささしれ小のほろ妻の境

同右抄

松と渡り月と涼や御座
孫の色で老もさむや文
川流るは世の節一

後を慕く物もあまらば
に白夜の殺もらなれど夏の月
月の香や多者もよみ清く
せむりやあまらうらうら
せれも津のあまらうらうら

遠石八幡宮

雲井仙

茶臼の音の賑をむらぬ
是ハ死仇の目利きとなれ
苦り得ん様の子三呼
何をけし何のひきりと

とよまらばしよの一曲
海も大おかし
海も以月の色もせぬ
二三痛はらや夏の梅
さしりしとあられは水
海もけるの海もせぬ
天地 遠白鳩 送 寄 折 寄
神の産しよ高土の智入るに
古々とあの子環は神もあ
恋叶の花は海を様と嘆

来てんまらぬおるも花ぬ梅柳の
こゝろや鷹の巻く疾うのね
鶯や雷もこけ稲のたしぬ声
干指の塵才あ稲やむ時毎
秋を―曉の露れと免てき
雲も垂き満て裾の隅の月
附けもさるや彌の海や花
積むやちぬ又露まぐ庭の粒を
折 茶臼の 欠ひのなる瓦と滑るおお付
夕影や業とほき 斥在鳥

兼天や世の端り氣のちぬ唐
小波こととるも深色い心の橋
軍学の術うらみる君のち
を若とむかかきも若きふ
来てんれ、都も淋し杖の音
鶯やほくも、踊り動く世
予らゆののちそのい古う秋を
湖中を日こふせむむや世の海り
夕立やあけの聲と新とる
朱もくもく、茶屋の粒塵や火の雨

昔 昔 昔 昔 昔 昔 昔 昔
其良勝や咬ばくふ大ねさ
昔の昔とくふ下り初様
綿せしあや若日のやま山
たふ雨や信守よける紫の魚
まよふのこころのせむせむ
度余りのあけろえの 蝸牛
夕日や福入りし 片端町
けく丁や小田を田打ふけつる
ふくしやふくまはし 新松
長酒しと飲りさぬぬ松の門

折 折 折 折 折 折 折 折
兼細や夜は兼客の下屋
客とけくふふふふ 智恵代衣
抄抄や二方角すくぬ返ひ寄
訴くく 海り抄抄 ぬきま
時ゆき 時ゆき 一日暮るり
又昔の田毎 淋し鴨の夕
忌鏡りて 垢をと暖のゆき
面瘦と乳母の穉治の詞合湯
昔の夜や旅人たらし大の念
三伏の反り ぬきま 堂御堂

はくね子とともをりていを遊ば
新かきく田主稲のひら
糸とのてまこけりせり大蛇のね
西鹿子新日作くや明かき
うれ花と忘れ明かき雨の朝
せき鷹の窓よちして木の葉
新小敷の傘のやちや郭へ
来ててんれ来ぬ人たて初儀
ふくしや白性をせそ君意持
雑炊の二指月と捨く降か

第戸極りあの海く吾解
たろあや杯まきてくの小か別
ちるあや曉うけてもしの人
来てんまは甘皮の若く多古流
其答と秋しるりや桐葉
負し心旭の葉へやああのか
ぬまういほく乾くまもけり村時
ふしねのひらふ初なり
ふくしや速く夜りまき蜻蛉
黄金うかけれ交り涼く

白 師 走 とも した 燈 之 茶 の 湯 釜
白 傍 世 へ 暁 け け け け け け け け
白 福 入 小 新 とう けり けり けり けり
白 理 板 へ かく かく かく かく かく かく
白 寂 入 や 白 蓋 と かん かん かん かん
白 小 舟 へ や 漸 進 小 舟 舟 舟 舟 舟
白 揚 代 の 雙 々 と 妻 の 舟 こと 舟
白 中 鴻 ぐ 何 の け け け け け け け け
白 郭 へ

人 ぬ の も 候 沙 汰 たり 木 鷹 糞
白 露 や 見 け 池 へ け け け け け け け
白 其 中 へ 一 獨 りの 了 忽 や 雪 の 朝
白 小 河 へ や け け け け け け け け
白 舟 家 へ 入 里 へ け け け け け け け
白 小 舟 へ や ぬ じ ち ち ち ち ち ち ち
白 舟 へ け け け け け け け け け け

同 答 寂 入 白

人 ぬ の も 候 沙 汰 たり 木 鷹 糞
白 露 や 見 け 池 へ け け け け け け け
白 其 中 へ 一 獨 りの 了 忽 や 雪 の 朝
白 小 河 へ や け け け け け け け け
白 舟 家 へ 入 里 へ け け け け け け け
白 小 舟 へ や ぬ じ ち ち ち ち ち ち ち
白 舟 へ け け け け け け け け け け

紙こころとのせむる扇
抽子の筆を乱言し
あゝ瀨のいよとさよふの月

同社

雪舟仙

こんか日和もほろひこ
きよ吹く同の世よふ
身よとまよふ
いふも
あや
夜はあくと明くはな

仕合しは仕合
相争味のし
口ゆくと病う斗うなり
音をとふも
おれふらゆけり実う入る
花ちれや着ひるも
まうとけや
まうとけや
行燈にまけ
あや

み難しこの
お冠 当 隠 廻文

難題 白雲志のわ

弾人のたひいと堤今の景
樓臺のあつらふみ
こあたる及まぬもの
こけぬまをいさめを異宿の素
揚舟の意の暮瓦の船掃除
月々ゆるりて
ふこめと極められ

世無識く乳あせりの子とす
うらさ日古誦をうや
持果の獅子の后徳や君徳を
乙多や乞食のふぬし
はさかしの涙とく
年の梅と生るたの
秋なるの松の姿
おのしねと衣色と
後冊

神とまよ
うくれまのこまきま
油日記

ほのみの流くほの池の中

寺町のわらわとまよる

葉のそよよの

黒田のまよる

荒れくさるを

柳のと

小輪のまよる

中び乳のまよる

折新家のまよる

当

雷のまよる

埋のまよる

名のたのまよる

をのまよる

戸のまよる

まのまよる

すのまよる

まのまよる

まのまよる

まのまよる

まのまよる

云儀の威光輝々しく
ぬはらひて法親成範の輝
天おろしめりし御
法

同

常や御倉ののりさし
海邊よりとさし
いささよる神の御前の若
月としやあもりの
むらさき
涼川さや海も
高居よるを

清くも清きや神の
長瀬やたし
そとさるや
所いふ
神子流の法
清む

明治六年

甲戌之二月写之

Handwritten text in a cursive script, likely Chinese characters, located on the right page of the manuscript. The text is partially obscured by ink bleed-through from the reverse side.

Handwritten text in a cursive script, likely Chinese characters, located on the right page of the manuscript. The text is partially obscured by ink bleed-through from the reverse side.



